

【ポスター発表】

日中活動場所がその人の居場所となる過程について

—統合失調症者へのインタビューを通して—

○ 北里大学 前場 洋佑 (009565)

キーワード3つ：統合失調症 居場所 地域生活

1. 研究目的

居場所という言葉が地域社会福祉の用語として注目されるようになったのは、1980年代の不登校問題がきっかけとされる（芹沢 2000）。すなわち、居場所づくりは当初不登校児への支援として行われていた。現在では、様々な社会問題に対して居場所づくりがキーワードとして用いられ、社会的弱者を支援する手段として位置付けられている。

中でも統合失調症者は、退院後も継続した地域生活の支援が必要であり、デイケアなどの日中活動場所が居場所づくりの一環として位置付けられている。ただし、デイケア利用者の30～40%に中断が見られ（池淵 1992）、通う場所があればそこがそのまま居場所となるとは言えない。なぜなら利用者にとって、通う場所があることと居場所があると感じることには隔たりがあると考えられるからである。そこで、本研究では当事者へのインタビューを通して、居場所づくりの要素及びその過程を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

統合失調症者は、精神症状が軽快して退院しても自宅が居心地の良い所とは限らず、すぐに社会復帰できない場合には、家庭での特有の居づらさが体験されているという（西園 1995）。そのため、地域生活を送る統合失調症者には家庭以外に過ごせる場所が必要とされ、地域生活支援として様々な場所で居場所づくりが行われている。しかし、そのような居づらさを体験した当事者がどのような経験を通して日中活動場所を自らの居場所と感じるようになるか、そのプロセスを知ることが生活支援を考える上では大切である。そのため本研究では、実際に日中活動場所を利用し、居場所があると感じている方へのインタビューを調査手法として採用した。当事者の居場所づくりの経験（通い始めてから現在に至る経緯、対象者が思う居場所とはどのようなものか、いつからその意識が芽生えてきたのか、そのきっかけには何があったのか、具体的に居場所とはどのようなものかなど）を聴取し、居場所に必要な要素や居場所となる過程を明らかにする。

対象者は、地域生活を送る統合失調症者7名。各対象者の概要については、年齢・性別・通い始めてからの期間を記載する。A（30代前半・男・12か月）、B（30代前半・女・1年6か月）、C（30代前半・男・6か月）、D（30代前半・男・1年1か月）、E（40代前半・男・10か月）、F（20代後半・女・8か月）、G（20代後半・男・5年）。日中活動場所として今回選択した施設は、対象者が利用する施設であり、デイケアおよび障害福祉サービス外の通所施設の2ヶ所とした。施設種別が異なる場所を選択したのは、日中活動場所に通いな

がら地域生活を送る統合失調者という幅広い対象に適用できる概念モデルを作成するためである。インタビューは対象者が利用する施設において、インタビューと対象者の1対1で半構造化面接を1人につき1回実施した。時間は1時間程度とし、静かな個室で行った。内容は対象者の承諾を得てICレコーダーに録音した。録音した内容は逐語録を作成し、分析には修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下M-GTA）を用いた。

3. 倫理的配慮

本研究は、立教大学研究活動行動規範に従って実施した。研究責任者が作成した説明資料を用いて、本研究の主旨、目的、ICレコーダーで録音すること、倫理的配慮について口頭で説明し、書面による同意を得た。同意後であっても同意の撤回が可能であること、撤回することが不利益になることはないことを説明した。また研究発表にあたっては、日本社会福祉学会研究倫理規程及び研究倫理規程にもとづく研究ガイドラインに則り実施した。

4. 研究結果

M-GTAの分析によって、9つの概念、2つのサブカテゴリー、2つのカテゴリーからなる結果図が作成された（表1、図1）。概念名は“”、サブカテゴリーは<>、カテゴリーは《》を用いて表した。

表1 カテゴリーと概念

カテゴリー	サブカテゴリー	概念	概念の定義
客観的側面	適応	習慣化	曜日を決め日中活動場所へ継続して通っている
		観察行為	日中活動場所の利用者、スタッフや物的環境を観察している
		公的交流	日中活動場所における利用者、スタッフとの関わり
	強化	強化行為	与えられていた環境だけでなく、自分にとって過ごしやすい環境を整えようとしている
		役割の遂行	スタッフや他利用者から提案された役割を行う
		私的交流	日中活動場所以外での利用者同士の私的な関わり
主観的側面		スタッフへの信頼	スタッフとの関係性が作れて頼ることができている
		醸成	居場所があるという感覚の芽生え
		居場所	当事者にとって居場所があるという感覚

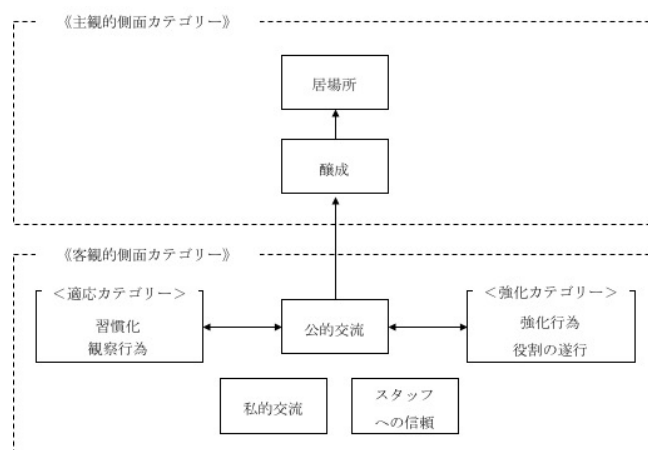


図1 結果図

5. 考察

本研究では当事者の語りから、居場所に必要な要素とその過程について検討した。居場所となる過程において、“公的交流”が中心的な概念であり、そこに<適応>、<強化>という2つのサブカテゴリーの機制が働くことによって《客観的側面カテゴリー》が構成され、それが居場所の《主観的側面カテゴリー》である“醸成”を経て“居場所”となっていた。統合失調症者の場合には、デイケアのように通う場所があり支援者が活動環境を作っても、そこが居場所にならないことがある。それは、日中活動場所での“公的交流”が深まらなるとその場所を居づらいつ感じ、それが続くと日中活動場所に通えず居場所がない状態に陥るからだと考えられる。居場所づくりでは、客観的居場所として通う場所があっても主観的居場所が形成されないと、居場所とならない恐れがあることが示唆された。